

佐藤正英校注訳「五輪書 宮本武蔵」ちくま学芸文庫 2009年1月10日刊を読む

五輪書

(現代語訳)

1. 朝に夕に努め、習練することによって、おのずから心が広がって体得されるところの大勢に対する兵法および一人に対する兵法として世間に伝えられているわが二天一流の兵法を初めて書き付け、地・水・火・風・空の五巻とした。
2. わが二天一流の兵法を学ぼうと志す者は、習練するにあたって以下のことを心懸けなくてはならない。
 3. 第一、邪悪でないように心すること。
 - 第二、兵法の道の稽古に励むこと。
 - 第三、もろもろの芸能・技芸に触れること。
 - 第四、さまざまな職の道を知ること。
 - 第五、なにごとであれ、ことの利害・得失を心得ること。
 - 第六、ものごとの良否・真贋を見分けること。
 - 第七、目に見えないところを感得し、察知すること。
 - 第八、些細な事柄にも心を配ること。
 - 第九、役に立たないことに手を出さないこと。
4. おおよそこのような勝つ理を心に留めて、兵法の道を習練すべきである。

P.51

(原文)

1. 右、一流の兵法の道、朝な々々夕な々々つとめ行なふによりて、おのづから広き心になつて、多分・一分の兵法として世に伝ふるところ、はじめて書き顕すこと、地・水・火・風・空、これ五巻なり。
2. わが兵法を学ばんと思ふ人は、道を行なふ法あり。
3. 第一に、^{よこしま}邪なきことを思ふところ。
 - 第二に、道の鍛錬するところ。
 - 第三に、諸芸に^{さば}触るところ。
 - 第四に、諸職の道を知ること。
 - 第五に、もの毎の損徳を^{ごと}弁^{わきま}ゆること。
 - 第六に、諸事^{めきき}目利^{しおぼ}を仕覚ゆること。
 - 第七に、眼に見えぬところを悟つて知る^{さと}こと。
 - 第八に、僅かなることにも気を付くこと。
 - 第九に、役に立たぬことをせざる^{さと}こと。
4. おほかたかくのごとくの利を心にかけて、兵法の道鍛錬すべきなり。

P.24 ~ 25

5. 兵法の道に関するかぎり、真直ぐなところを広く見てとるのでなければ、兵法の熟達者にはなれない。兵法に熟達するならば、一人であっても、二十人・三十人の相手に負けることはない。
6. 先ず、片時も兵法から心を離すことなく、真直ぐな兵法の道の体得に努めて、手で相手に勝ち、物を見る眼で勝ち、稽古を積みすべての動きに自在さを得て、身体で相手に勝ち、兵法に熟達して、心でも相手に勝つ。この境地に達したならば、どんな場合でも相手に負けることはないであろう。
7. また、多人数の合戦の兵法としては、勝れた士卒を持つことにおいて相手に勝ち、軍勢を動かすことにおいて勝ち、一身を正しく修養することに勝ち、領国を治めることに勝ち、領民を養うことに勝ち、世間の礼儀・作法を伝え行なうことに勝ち、どの芸能・技芸においても相手に負けないありようを体得して、武将として一身を支え、名を挙げるのが兵法の道である。

P.52

<コメント>

- (1) 宮本武蔵のおそらく唯一の著書である「五輪書」は、剣道を学ぶ人はもちろん、すべてのスポーツマン必須の古典中の古典。読み込めば読み込むほど、仕事や生活にも役立つ。
- (2) 古典を読むことは時空を超えた著者との対話。本書などを通して「五輪書」に親しむことにより、宮本武蔵との時空を超えた対話を是非果たしていただきたい。
- (3) 是非御一読を。

— 2016年3月9日(水) 林 明夫記 —